

第六回芝不器男俳句新人賞最終選考会選考及び授賞式議事

日時:2022年5月21日(土)14:10~15:35		
場所:ゆいの森あらかわ ゆいの森ホール		
コーディネーター	筑紫磐井	
選考委員	城戸 朱理	
	齋藤 慎爾	体調不良により欠席
	中村 和弘	
	対馬 康子	
	西村 我尼吾	
特別賞選考委員	関 悦史	
司会	藤澤 貴史	

司会：選考を開始いたします。筑紫先生よろしくお願いたします。

筑紫：それでは、いよいよ手に汗握る選考バトルが始まります。先ほど第1次予選に残った全作品についてコメントを頂きましたが、何となく選考委員の推している感じというのはお分かりになったかもしれませんが、これからはちょっと誠に残酷なのですが、この32の中から、それぞれ審査委員から2編から3編の最終候補作、ゆくゆくはそれをさらに1つに絞っていただくということになりますけど、それぞれ2~3編を推薦していただくという作業に入りたいと思います。2~3編ったら3編でしょうけれど（笑）。

ということで、これからは絞り込み作業のスタートということになります。城戸さんはまだまだ悩んでいるようですが（笑）。

筑紫：決意が決まったら、順次……。それとも、逆にしますか？こちらの西村さんのほうから。

西村：あのね、はっきり言いましてね、そんな3つとか言われても困っちゃう。それでですね、自分がいいなと思ったのもあれば、先生方の話を聞いて「ああ、いいな」と思うのもあって、それはもう、今、私の中では10ぐらいになつとるわけですね。それで、その10の中の誰が取ってもおかしいというようなね、そういうふうな状況になっている訳ですけども。

ただ、芝不器男俳句新人賞が非空非実の文学を目指す、そういうふうな、ある意味でのトライアルであるとするならば、私はやっぱり前人未到の境地、これが表現として完成していようといまいと、少なくともそういうことをやろうとした若い魂が受賞していったと思うんです。第1回芝賞新人賞の富田拓也さんもそうですし、それから第3回新人賞の御中虫さんですね。関さんだってやっているし。それはわれわれ、なんて言うのか、「選者賞」

があるので、それは、最後はそれぞれの選者の方々が、これがこの今回の、宿命の、まあ言うたら波動関数が観測によって、収斂することによって意識が起こると。また意味不明なことを言っているのですけどね(笑)、ぱっと収斂することを、これからの1時間の議論で決めなきゃいかんのやろなあと思っていますけれども。

ただ、私は今回いろいろキャッチフレーズを出してきて、そういう意味ではあるテーマで非常に優れた作品を出している、というので、芝賞はいいかな。ですね。それでもいいという考えもあるでしょう。どうかというのがちょっと自分の頭の中で。そうするとテーマ的に優れている作品は、はっきり言って芝賞で予選通過するというのは、もう受賞したようなもんですよ。だってベスト9に入っているんですよ。130編以上が競う中で残った作品ですから、そんなもんね、選べと言うのも毛頭むちゃくちゃな話なのですけども。というような形でね。ここで言わないかんのですか？まだ言わんでええんでしょ？

筑紫：いやいや、もう今、言ってください。

西村：今、言うの？ えー！

筑紫：悩みは十分、分かりましたから。なんかもう、今聞いたら閉会の辞を述べているような(会場笑)。

西村：ではね、私はそれならば個別テーマの優れた作品は外します。普遍的な取り組みをした作品を推したい。普遍的な作品の新しい取り組みっていうのは、先ほどからずっと言うてますけども、3つあると思います。新・花鳥諷詠。それから虚空間への挑戦。それからもう一つは、ここがね、悩むところです。悩むのですけども、声字実相義。この3つから、従って私が推すのは、新・花鳥諷詠、115番。虚空間への挑戦、97。

筑紫：もう一度。

西村：それと。

対馬：ちょっと待って。115番？

筑紫：115番と？

西村：115でした？ここで番号間違っていたらえらいことや。115でした？新・花鳥諷詠115と、それから虚空間への挑戦の97、それと声字実相義、108。この3つを。他が悪いのではないですよ。アジア活力系女子とかね、むちゃくちゃ暗いとかね、それからね、定型で勝負とかね、いろいろあるけども、そういう形で絞れと言ったら僕はこの3つに絞ります。

筑紫：西村劇場はこのぐらいでいいですか。このまま、もうリアルタイムで世の中に流れていますので(笑)。

筑紫：じゃあ、西村さんの3点は、97番、108番、115番ということで。

西村：前半の人、全部落としたからね。

筑紫：ということでよろしいでしょうか。それじゃあ、その次、中村先生、よろしいですか？もし3点を選ぶとしたら、どれ。中村さん。

中村：私はもう最初から決めておまして、選者はそれでなきゃ駄目と(会場笑)。ここへ

来て、あやふやな態度で、ふやふやしてたら駄目であります。一言、苦言。そして芝不器男賞はね、応募してくる若い人たちは、言語と俳句を習うためにしているわけじゃないでしょう。将来の俳句作家を目指して勉強し、そうになりたいという心の底に念願を持ってきてきているわけであってね、それにこちらが応えないと。正面にぶつかって行ってね、選者と戦いですよ、これは。甘やかしたらいけない。「みんないいです」なんてとんでもないです（会場笑）。

これは西村さんだけに言っているわけじゃないよ。僕は自分の心を鬼にしてそういうことを申し上げている。私なんかの若い頃は、若い人がいっぱいいた。今、若者はちょっとちやほやされ過ぎる。「寒雷」の句会に行けば、100人のうち30人ぐらいが20代、30代。当時は競っていたわけですよ。だけど、今はそういうことがなくなってしまった。句会そのものがご高齢の方の寄り合いみたいになってしまっただけで、それじゃね、俳句に進歩がないというふうに思います。

まず私が推したのは6番の、これ、A、二重丸を僕は付けているんです。非常に心象が深い。そして、よくその前提として大変勉強している。過去の前衛俳句、俳句がたどってきた戦前・戦中、それから現俳協に主に集まった金子兜太だとか、鈴木六林男だとかをはじめ、新興俳句の中のある時期、前衛俳句といわれた赤尾兜子だとか、そういう人たちの作品を含めてよく勉強している。俳句だけではなくて、現代詩を勉強している、この人は。例えばね、昭和初期の北川冬彦だとか、安西冬衛だとか、それから西脇順三郎、その後の戦後の「荒地」のグループの鮎川信夫だとか。僕はその跡が、これ、見えるんですよ。よく勉強しているなど。

だから、この作者の作品自体が、ある意味で言ったら過去の前衛俳句の缶詰みたいにも見えたりもします。なぜ缶詰と言ったか、その跡が見え過ぎちゃうとこうなっちゃった。あるんだけど、僕はやっぱり30代、20代で冒険しないようなのは駄目だと思う。冒険してほしい。まだそれで失敗したらやり直しも利く年齢なわけであってね。

そして僕がこの作者を推したのは、この先にこの作者がどういう変貌を遂げてくるんだろうかという、実は期待感がある。そして過去の作家でいうと、西脇順三郎さんなんかは非常に前衛的な、若い頃は作品を作っていた。しかし、晩年は非常に散文詩に近い状態に行った。じゃあ、金子兜太はどうだった。この前衛の経験があるからこそ、行けたところがあるということですね。僕は、今これは、前衛っていうのは長続きしない。前衛句、前衛作者がどのくらいの意識で作っているかは別なんだけども、長続きしない。その後に来ることが大事なんだ、実は。それをね、僕は期待している。私は推すとしたらこの人しか今回ない、というぐらいであります。

その他は一応、言いますと、僕は、6番はAの二重丸で通っている。そして、もう2人かな。Aで通ったのが55番の作品と、それからもう1人が119番。これはAに下向きの矢印がひっついていて、ちょっとマイナス点が入っている。それ、マイナス点は僕が先ほど言いました、助詞止めがものすごく多い。もう助詞止めだらけ。3分の1ぐらいが助詞止め

になっちゃっているという。そして、この作者だけじゃないの。今、流行しているのかね、この若い人の間で助詞止めが。それが格好いいのかどうか分からないんだけど、俳句の骨格というのを考えてみた場合、非常に燃焼度が低くなる。ただの散文に近い形になっちゃうのね。だけど、口当たりはいいですよ。口当たりはいいんだけど、それじゃ俳句の燃焼度、何のために俳句の五・七・五があり、見えない骨格——これは伝統を引いてきた見えない骨格という、何のためにあるんだということでもありますね。けども、僕はこの作者をかなり買っている。抒情があり、とてもいい抒情を内質的に持っている。才能を持っていると言ってよいでしょう。

そんなことでAは3人なんだけど、その中で一番僕は今回推したいのは、もう最初から決めておりました、ナンバー6の作者です。他の選者がごちゃごちゃ言っても、これを僕は推します。以上であります。

筑紫：ありがとうございます。じゃあ、中村さんの3票は、ちょっと強弱は別にして、6番と55番と119番と。けども、6番で決めたと、そういうことだそうでございます。それじゃあ、対馬さんはいかがでしょう。

対馬：はい、中村先生の力強い選考のあり方に触発されました。私も予選で読んで良かったと思った3点を、他の先生方の今日のお話を聞いたのですけれども、その最初の3編を推したいと思います。まず、22番と45番と67番の3つです。その中で1、2、3はあるのですけれども、ちょっと今は控えます。

筑紫：ありがとうございます。それでは最後に城戸さん、いかがでしょう。

城戸：予選の段階で複数の票が入った作品っていうのは、実は3つしかないのですね。6番が、中村先生と私が。それから62番、中村先生と私。97番が、西村先生と対馬先生。一体どういうふうになるかと思っていたのですが、ここまで3人の先生方が発表された3作に関して言うと、はっきり言って重複が全くありません。どうなることやらと思いつつ、私の3点、選ばさせていただきます。120番。それから123番、130番。

筑紫：城戸さんが120番、123番、130番ということですね。そうすると……。4人で3編推したわけですから、12個作品があるということになって、これはサドンデスですね。誰かが倒れるまで議論しないと。

西村：しかし、議論まで収斂したい。

筑紫：それではまず、候補をとりあえずノミネートします。6番、22番、45番、55番、67番、97番、108番、115番、119番、120番、123番、130番ということになるわけです。審査員席は大変ですけれども、聞かれている方はみんな楽しみでしょうね。どっかで、かすっているという方も、たくさん今日はいらっしゃるのではないかと思います。

先ほど中村さんがおっしゃったように、「もう、これオンリー」というご意見もありますけれども、とりあえず今までは、今までっていうのは前回ですけれども、複数の点が入った方がいらっしゃったものですから、それを中心に議論したいんですけど、今回は絶対、全然やり方が変わって来ざるを得ないということになります。

以前、第5回の時、コーディネーターを引き受けろと西村さんから言われた時にですね、「この芝不器男俳句新人賞っていうのはどんなに紛糾しても、最後に神様が降臨して1つの作品を決めてくれる」というふうに、西村さんが言ったのですが、本当かいなと思ったけど、全然そうならなかったことが今回分かりそうでございます。

これだと、複数のものから絞り込むっていうのは難しいと思いますので、むしろこれから皆さんが、今、推薦していただいたものの中で中村さんが6番を二重丸で推しましたけど、それぞれ他の選考委員も絞ってですね、それで議論したほうがいろいろ、時間をどういうふうに進めるかっていう点からもいいのではないかと思いますので。

それでは、すみません。西村さんから3点、97と108と115が挙がりましてけど、この中でオンリーワンとするならどれがいいかっていうのは。

西村：オンリーワンはもう明確です。97です。

筑紫：97です。

西村：ただね、僕は今、先生方のおっしゃることを聞いて、僕の1年半の努力が報われたと思いました。私、「全部点数付けたい」、言ったでしょ。先生方の選んだ作品は私の全部候補です。従って、誰になっても異存はないです。少なくとも俺の目に狂いはなかったという確信を今、持っています。

筑紫：ありがとうございました。では、ちょっとつらいでしょうが、対馬さんもオンリーワンを選んでいただけますか？

対馬：先ほども言いましたけど、さっき、「俳句の神様が降りてきた」ならず、「芝不器男の姿が降りてきた」ということで、67番。

筑紫：分かりました。ありがとうございます。じゃあ、最後に城戸さんも3編、推薦いただきましたけど、早々と1つに絞っていただくのは恐縮ですけども、よろしく願いいたします。

城戸：恐縮なんて思っていないでしょう（笑）。じゃあ、123番。

筑紫：123番。

城戸：実は通常であれば、おそらく皆さん点数が高い句というのに印を付けていって、その数でもって候補を決められていると思うのですが、私の場合、実はそういう形で印を付けてない句をずいぶん挙げていまして。それは何でしょう、この現時点での完成度っていうものよりも、何か強い訴求力とか訴えかけてくるものがあるというふうに自分が考えたものを選んでいきます。その中でこの、最後3点選びましたが、中でも123番にそうした力を感じました。

筑紫：ありがとうございます。どう進めましょうかね。とりあえず、一推しがみんな決まったので、その一押しについて他の審査員の方々がどう思っているか。つまり、6番について、城戸さん、対馬さん、西村さんがどう思っているか。あるいは67番について、城戸さんや中村さんや西村さんがどう思っているかを、ちょっと簡単にコメントをいただいて、議論を次に進めたらどうかと思いますが、そういうことでよろしいでしょうか。

じゃあ、まず中村さんは 6 番を断トツで推したのですが、西村さん、対馬さん、城戸さんはこの作品についてどう思われますか。西村さんから、もしよろしければ。

西村：私は正直に、自分が客観的に 1 カ月半かけて、基本点と芸術点を付けた結果に従いたいと思います。この 6 番は私の点では 44 点。それから城戸さんの 123 番は 45 点です。従って、1 点の差なのです。1 点の差なんかどうでもいいのですけども、ほとんど僕は 6 番と 123 番が、芸術性および基本的俳句の技術の点においてはほぼ同格だと思っています。従って、どちらになってもいいです。ちなみに、僕の 97 番は 51 点です。51 点って主観が入るとるからあれやねんけど。

従って、僕が 6 番でもう正直に、この書いたメモがあるんです。そこに書いているのは、「兜太調」って書いています。この作品を読んで僕は金子兜太がバツ、バーと浮かんできたんです。従って、これは金子兜太を体現している作家であると。だって、これはまだ本当に 6 番目ぐらいやから、点を付け始めて 1 日目か 2 日目ぐらいのあれですけども、強烈なイメージがあったのは間違いない。従って、正岡子規国際俳句賞の日本人で唯一の受賞者が金子兜太です。だから、その系譜の人が芝賞というのはあるかもしれんという感じはするのですけども。ただですね、今言ったように僕はどっちも同格や思うのです。どっちがいい？

ただ、僕は 6 番でいいなと思った作品、僕はいいと思ったのは 35 番目の句、「顔なし家畜ボタンを押せばなんでもできる」とかね。それから 48 番目、「霧の海に顔燃え時代そらおぼえ」。それから 57 番目、「羅漢の罅（ひび）へ桃握るときその雫」。それから……。こう、何て言うのでしょうかね、暗緑地誌を読んだ時のようなイメージみたいなんがバツとこの作品はよみがえってくるものでありました。従って、今はどっちにすんのや？と言うたら、ちょっとこれからの議論を待ちたいという感じです。それからね、今は 6 番ですね、議論でしているのはね。

筑紫：今、一応出たコメントは、6 番と 123 番であれば、点数は切礫切迫しているということですね。対馬さんはどうでしょうか。6 番について、どのように。

対馬：第一印象ですね。もう言葉と感性がぎゅっと詰まっているというか。「兜太調」と言いましたけど、兜太の土着性のようなものとはちょっと違う感性を感じました。もっと超近代的なというか、その超近代的な中の詩的なものの深みというのを、言葉で求めている。

ただ、言葉がすごく勝っている句なので、私はあえて今回は言葉が前面に出すものでないのを第 1 に推したのですけれども。あえて反発して。だからこの 6 番は 6 番で、そんな前衛的というフレーズでは、いいなとは思いますが、その前衛的っていう定義付けたというのが、詩的に入り組んだり難しかったりすることが、ただ前衛的なのかどうかといたら、また違うと思う。古さの中にも新しさがあるというか。そういうところも求めていきたいなど。

筑紫：ありがとうございます。では、城戸さんはどうでしょうか。6 番はどのようにご覧になりますか。

城戸：6番は私も予選で選んでいて、大変印象深い作者だと思いました。中村先生のほうから「非常によく勉強している」というご指摘がありました。確かに現代詩を背景にしているエコーのようなものを感じます。ただ、強いて言うならば、あまりにも完成度が極めて高く、あまりにも詩的過ぎるということは言えるかもしれません。

ただ、例えば74番の「人曲」と書いて「デカメロン」ってルビ振ってありますけど、「人曲（デカメロン）読み水底に針落ちる」なんていうのは、このコロナ禍に非常に響くものがある、この「デカメロン」自身が黒死病の流行を背景にした作品ですし、しかもこれ、「人曲」っていうのは後でいわれるようになったもので、つまりダンテの「神曲」っていう、ルネサンスを代表する作品があります。

ただ、「神曲」っていうのも、あれ、独特な訳で、原題は「*La Divina Commedia*」。つまり、当時はハッピーエンドで終わるものが喜劇であって、ハッピーエンドじゃないものが悲劇っていうふうに分類されていたので、*Commedia* なのですね。それに対して人間の営みを描いたのがボッカッチョのデカメロンであると。それで疫病の中で語り合う物語なんですけども、「水底に針落ちる」なんていうのはいかにもこのコロナ禍にふさわしい俳句になると思うのです。とにかく素晴らしい作品だと思います。

筑紫：ありがとうございます。じゃあ、ちょっと順次、伺っていきたくと思います。対馬さんが一推しをされたのが67番ですけど、どうでしょうか。他の委員の方々に、この67番についての感想というのは、西村さん、いかがでしょうか。

西村：67ね。67はね。67、67。もしもし（会場笑）。

筑紫：はい。

西村：私はね、いいと思いましたが、8番目の句「一本は海に吼えたる黄水仙」とかね。それから45番目の「都忘れ躑めば胸を風通る」とか、それから91番目の「星降るや山に漲る星の息」とか、割とですね、非常に素朴な、なんと言うのでしょうか、対馬康子好みのリリズムというのが全編にあふれているんですけども。

この作品は、芸術点は非常に高いけれども、基本点において一句それぞれ詳細に言えば少し足りないということになっているんです。私の評価では40点です。でも、40点ってすごいんですよ。大体ね、10点台とか20点台がほとんどですからね。10点台、20点台。30点も後半になってくると、大体予選通過するのは30点台以上でないと通過できない。40点で、予選通過全体作品の中では総合点には中位、芸術線では上位5位ぐらいに入る。そういう感じの作品だと思います。

未完成なんですよ。未完成。未完成だけでも、高いリリズムを持っている。この作品を書けるかどうかですよ。第1回芝賞の富田さんは初めの芝賞に応募したんですけども、それまで俳句を書いたことがなかったんですね。でも、応募した時に技術的には完成されていた。俳句初めて書いて、それまで短歌書いているんです。短歌書いていたら七・七が出てこなくて、五・七・五に行ったという。

さあ、どうでしょう。この67番を選べば若い人に対して、若いかどうか分からんな。若

いだろうとは思いますが、若い人に対して「よっしゃ！」っていう感じになるでしょうね。でも、中村先生が言っているように、若いやつらは未来があって、甘やかすんじゃないってのも、未来がありますからね、たぶんね。他の人が年取っているかどうか、ちょっと僕も分からない。勘で言っているわけですけど。さあ、どうでしょうね。はっきりしない。

筑紫：中途半端ってね。

筑紫：じゃあ次に、中村先生、この 67 番はどうですか？

中村：なかなか抒情の質がいいなと思うんですね。僕が好きな句は、15 番目の句「砂溜る破船の中や南吹く」。しっかりした、ね。それから 65 番目か、「涸川の夜に白波の棲みつける」とか、67 番目「初雪のこぼれくる夜の広さかな」。季語も豊かさも感じさせてくれるなと。だけど、どうも 100 句見てみると、玉石混交みたいなのところがあってね。

例えば、93 番目「冬木に日木の生涯の閃けり」とか、94 番目「ボールペン幾度か掠れしぐれたる」とか、99 番目「寒満月三十秒の通話かな」。いいようにいて、何かあるかなと思っても情感が湧いてこないというのかな。いろんなものは混じっているのだけど、資質の良さは感じられます。だけど、僕の評価、A・B・C だとちょっと申し訳ないのだけでも C という、当初から、予選の段階から C になっちゃってね。作者には恐縮であるのだけでも、期待感はあります。今申し上げたような、しっかりしたいいい句あるな、というふうには思います。以上です。

筑紫：ありがとうございました。じゃあ、最後に城戸さんはどうでしょう。この 67 番の作品っていうのは。

城戸：対馬さんの選だと、実は私、22 番を最後の 3 作に残すかずいぶん迷ったんですね。67 番はちょっと考えてなかったのですが、今読み直すといいですね、確かに。これ、対馬先生が、67 番目の句「初雪のこぼれくる夜の広さかな」について言及されましたけれども、「涸川の夜に白波の棲みつける」、65 番目の句なんかも非常に豊かなイメージで。ある種の具象性とそのイメージの広がりっていうもののバランスがとてもいい作者だと思います。

ちょっと、あれですね。先ほど関悦史さんがこの前段の討議で「今回、誰が受賞してもおかしくない」というふうに話していたのをちょっと聞いたのですけれども、だんだんそういう様相を呈してきました。

筑紫：ありがとうございます。じゃあ、ちょっとその次の、西村さんの推された 97 番ですが、これはいかがでしょうか。中村先生、この作品に対して。97 番ですね。

筑紫：昨日、西村さんの哲学的な講演が効いちゃってね。

中村：(しばらく黙考) ……

西村：いえいえ、……これは中村先生の心の声です。

中村：んーあの一…… ちょっとした気の利いた散文を読んでいるような感じでね。62 番目の句の「旧友を拾いに向かう白雨です」63 番目の句の「許されるための彼へのすいかです」。「です」「です」。口語的に作ろうという、口語俳句としているのだけでも、同じ調子

のものがたくさん。この真ん中の辺り、みんな「です」なんだな。74番目の句「棧橋が端までしみた時雨です」。まだ俳句の骨格っていうのかな、それをまだ見ていないんじゃないかなというふうに思いました。「です」の句が非常に多く、もう真ん中辺のところかな、これ、ほとんど「です」。報告だね。「何々です」ってね。そうなっちゃっている、と私は思います。

西村：ちょっといいですか、一言。実はですね、この作家は前回の芝不器男俳句新人賞にも応募しています。その時は100句、全部「です」。100句、全部「です」で作って、それで4年間、自分の中の、要するに……。ものすごいキャリアの長い作家です、この人は。それでほとんど若い時にも、何て言うのでしょうかね、テクニックの極みいうので評価されていた人です。もちろん、私は「です」25句並んだらね、これでもう誰か分かるわけですね。それでいろいろと考えて、それであれしているのですけども、決して俳句の骨法が分かってない作家ではない。俳句の技法については、もう20年にわたって修練を、20年にならないか、続けている作家だということだけは、ちょっと先生のですね。

ここに25句だけ「です」がバツと出てきているのは、確かにそこはね、僕は今回の作品、減点かもしれないなという気はします。なぜ100句「です」としなかったのか？なぜ？なぜ？というのはあるんですけど、ただ、前のところ、それから私が言いましたように、全体、始まりも終わりもない世界へそういうところへ誘うための一つの章として、この「です」を入れるという過去でもない、未来でもない現在時制を入れているのかなとは思いません。だから、中村先生の意見がズシーッとくるわけですけども、虚空間を狙うならなぜ100句「です」にしなかったのだ？というのは、私の思いとしてはありますね。

中村：ちょっといいかな。西村さん、優しいね。ほんと僕は感心する。若い人たちをね、こういうふうにして取り上げてね、140人全部そうしたいぐらいの気持ちで主催しているっていうのが、僕は本当に感動したりするのだけども。こと作品になるとそういうわけにはいきませんけれども。その思いも含めてね、やっぱり指摘するところは指摘しなきゃいかんなど、いうふうに思っています。今、西村さんからお聞きしたことはね、そのとおりだと思うのです。僕は「です」がいけないって言っているわけじゃなくてね、もし「です」なら、そのように徹底しなきゃいかんだろうと、いうふうに思いますね。以上です。

筑紫：言っておきますけど、これの作者が誰か聞くのは、他の審査員は誰も分かっていないので。

西村：私は前回、選んでいますから。前回の芝賞で。だからこの予選で見た時、「あっ、彼だ」と思っているんです。もしかしたら他の人かもしれない(笑)。

筑紫：フェイクかましているかもしれないし。それじゃあ、対馬さんはいかがですか。この97番について。

西村：それはちょっと俺の先入観が…。

対馬：私も前回、この「です」の俳句について語ったことがあるので、分かるんですけども、私はその「です」の俳句でなくても、っていう分、詩情が感じられる作者だと思

ました。例えば、これは言ったのかな、さっき。7番目の「降る雪が記憶の雪に拘り替わる」。この、あえてこの表現を、挑戦している、ではないところに作者は位置しているはずなのですけれども。だから、この書いている表現文体は選考委員に対する挑戦なわけですよ、作者の。だからそういう意味で、私は予選では上位に挙げていました。

筑紫：究極の一句としていろいろご意見を伺っているのですが、それに対するコメントとしてはどうですか？

対馬：究極の一句？

筑紫：要するに、新人賞に決めるかどうか。これ、西村さんは推しているけど、対馬さんは推していないけど、そういう意味でどうかっていう。

対馬：だから、予選ではそれこそ3番目、4番目に取っているの。この人が俳句新人賞でも私は異議がないし、私が推す人はもちろん、もっともっといいと思っていますけれど。

筑紫：じゃあ、すみません。城戸さん、いかがでしょう。

城戸：西村先生、これが、（西村先生の付けたキャッチフレーズで言う）「虚空の旅人」でしたっけ？

西村：えっ？

城戸：虚空の旅……

西村：そうですね。始まりも終わりもない世界を、絶対、イメージしているんだと僕は思ったんだけど。この「です」っていうのは、つまり言うたら、現在時制の中に留めるための、いわゆる量子のある句やと思うんですよね？だから全部五・七だけで、25句は五・七で……

筑紫：マイクで。

西村：25句は五・七で書いているんですよ。五・七全体の作品の中を「です」という、この聞こえない音をワーッと通しながらやっている。それまではリアリズムでずっと書いているでしょう。それをバツと時間のあれを入れて、その後にやるという構成なんですよ。だからね、始まりも終わりもないところにこの4年間考えたのかな。この構成を僕が思った時に、そのリアリズムの関係で「です」、前に言ったようにね、人母とを入れようとするんですよ。そういうことがバーッと……。それで空間を発見するという。まあ、言うたら量子世界の固定化それからちょうど読んでいたから影響を受けた。ただ中村先生がものすごく厳しい。「俳句の骨格ができてないんじゃないか」という指摘。それはね、風雅断っておるから技術が落ちないというね。常に収斂するという、まあ我々も……。

城戸：そのリアリズムっていう言葉が何度か出てはいますが、確かに非常にリアリティーのある作品で、特に前半はそうですね。前半の50句、リアリティーがあって、しかもマカロニであったり、あるいは12番目の句、「おでん鍋言えない過去と言える過去」のおでん鍋であったり、ハンドクリームであったり、誰もがイメージできるリアリズムっていうものを持っているのはよく分かる。ただ、こと私的には、驚きがない。

西村：驚きがない？

城戸：うん。跳躍がない、気がしますね。詩的な跳躍がない。あと、やはりこの「です」なんです、今、西村先生がおっしゃったのは分かります。ただ、結局、語彙（ごい）の中で時制を持つのは動詞だけのわけですよ？結局、こうやって現在形で全部書いてしまった時に、俳句ってというのは例えば英訳された時ってというのは、通常、名詞節が 2 つ並ぶ形になる。ところが、これだと単なるセンテンスになってしまいます。そういう意味では、ちょっとこの「です」の連作は、私は疑問がある。

筑紫：ありがとうございます。それでは最後に、城戸さんが推された 123 番ですけど、これは、西村さんは先ほどの 6 番に匹敵するぐらいの大差のない点数を付けていらっしゃるということですが、何かそのあとは補足することはありますか？123 番について。

西村：（間違えて 122 番の方の）20 番目の句、「うはぐすり瞳孔祭を鳴る虚」。それから 59 番目、「雪よ暝ると鉄の音が落ちてくる」。66 番目、「雪に曇る鈴を磨けば幻翅痛（げんしつう）」。これ 122 か、そうか、そうか。ごめん、ごめん。123 番の方の 7 番目の句、「ほどきゆく紙片の舟や冬籠り」。25 番目の句、「氷瀑にかつと歩むを嫁とせり」。これなんかええですよ、奥さん、ねえ。俺は、ぐっと来たっすよ。45 番、「まじろげば幼きままや花吹雪」。58 番「万緑に雨一切は加速せず」。99 番、「胡乱なる歯車としてイ（たたず）めり」。うまいですよ。受賞されても異存はない（会場笑）。

筑紫：分かりました。それでは中村先生、いかがです？ この 123 番については、何か…。

中村：だんだん僕が悪者になってきた雰囲気がありますけど（一同笑）。僕はなかなかいいなと思います。ぱっと読んでも、例えば 42 番の「花冷の円天一羽吾を鉤（かぎ）す」。これは非常に自然的というのかな、こういう側面を持っている、というところに僕はね、良さを感じるのだけでも、全体としてね、もう一步、努力してほしいなと。俳句の勉強をもうちょっとしてほしいという感じは残りました。以上です。

筑紫：ありがとうございます。では、最後に対馬さんはこの 123 番はいかがでしょう。

対馬：城戸さんが残した 3 編の中では、私、130 がいいなと思っていたのですが、城戸さんが 123 っておっしゃって。これもすごく感性と飛躍がある作風だなと思ってはいます。けれども、なんというかもっと感性と勝負するなら、もっと他にも…何かあるのではないかと、候補作が出てくるのではないかと。この 1 点に絞る確固たる理由が……。悪いって言うているのではなく、なんかそんな感じです。漠然とした感じ。

筑紫：ありがとうございます。ちょっといろいろ意地悪いことを聞いたのは、悪口を言ってもらわないとですね、最後の 1 点は決まらないものですから。今、一通りお伺いしましたところ、作品番号 6 については中村さんが一推しはともかくとして、西村さん、対馬さんも城戸さんも……

対馬：ちょっと 6 番ね、ちょっと気になるのですが、こういうのはどうなのでしょうね。

筑紫：どうぞ。

対馬：とても前衛的でいいのですが、89 番目の句の「ババア」っていうのは、あの、どうしても抵抗があるのですけれど。そういう言葉は全然入れても、もちろん詩なのですか

ら、何を入れようが構わないのですけれど。私自身の個人的な感じではちょっと抵抗があるのです。

筑紫：中村さん、いかがでしょうか？

中村：これは僕も気になったね。よろしくない。「ババア」なんて、差別用語的になっちゃう。けども、そういう言葉はあるのでね。どうかと、僕はそっちのほうの専門家じゃないから、なんですけども。作品の中で品が落ちちゃうのね。少し通俗になってしまう。この句に関しては、私も反対です。あんまりいい感じを持ちません。

対馬：それを聞いて安心しました。

筑紫：ただ、最終的に決めたら、これが芝不器男俳句新人賞の入選句、優勝句だっていうことになりますけど、それでいいかどうか、1句だろうと。よその賞では類想句が混じっているということで辞退された作家もいるみたいですから。そこら辺は一応、念頭に入れておいたほうがいい。

それから、そこら辺はこの芝賞の実行委員全体として、今後の発展についての責任を持つと。いろいろ、最近クレームをつけることもたくさん出ているようですので、この作品全体がいいか悪いかっていう話は別に、そこら辺の個別個別のところに気を配る必要があるかどうかというのを、最後は決めないといけないだろうと。その点をちょっと念頭に入れておいていただきたい。

西村：あの、実行委員長として、芝不器男俳句新人賞はともかく、文学的表現の中にはですね、本来の言葉の垢を、本来使用されてないようなコンテキストで使う、ということが詩の本質であってですね、言葉を概念どおり、あるいは社会規範のとおり使っている、という立場もありますけど、これは文法の世界と。そこは、何ていうんでしょうね、文学としての一線をちゃんとわれわれが守っていく。そこに敵意と、人々に対する差別と侮蔑と、そういうふうなことが根底として存在する作品であってはいかん。少なくともこの作品は、言葉はむちゃくちゃですけども、言っていることは感謝しているんです。

ただ、直感的に金子兜太的、脇が甘い、っていうのはあるかもしれません。もっと率直に言うと、ごっついその親近感を「ババ」ですね。「ババ」。「ア」が入るとるから、これが問題なので、漢字で「婆」やったら問題ないんです。ただ、「木曾のなあ」という兜太の句があるじゃないですか。ああいう言葉の使い方に通じるものがあるのではないですか。それに対して対馬康子的な反応が絶対来るはずだと思っているわけですね。しかし私はこの作品によって全体の評価が左右されることはないと考えます。だからこの作品により全体作品の評価を議論するのは行き過ぎではないかと私は思います。

筑紫：なかなか難しいのは、これ……

西村：難しい。

筑紫：作品を詠んだ作者の問題。それからここに並ぶ、これを選んでしまった選考委員。

西村：そうですね。

筑紫：それから、この作品を読む読者。法令の……

西村：今さらこれはおまえら、何のせいにしとったんじゃちゅう話になっちゃうんで。

筑紫：そこは念頭置いておいて、ここの責任において、こういう偏屈的に見えるかもしれない言葉を使っても是としたという決定をしてもらいよりしょうがない。

ただ、その前にまだ 4 つ並んでいるわけですね。今、いろいろ伺ったコメントで見ると、6 番については積極的にノーと言ってらっしゃる選考委員は今のところいらっしやらないようで。いい、悪いという程度の差はありますけど。それから 67 番については、これは中村先生からかなりネガティブな感想がありました。

それから 97 番については、これもちょっと中村先生と、城戸さんも少し「驚きがない」かと、前向きな発見が。それから 123 番は、悪くはないけれども、もう一歩というような感じという状態。この意味で言うと減点法になりますけれども、6 番と 123 番あたりは、積極的に今、反対している人はいらっしやらないかなという感じがするのですが、そこら辺はいかがでしょうか。

西村：いいですか。

筑紫：どうぞ。

西村：私はあえて挑戦したわけです。ここまで賛同を得られない中で（会場笑）、あくまで賞を主張すべきかどうかというのはですね、なかなか難しいと思います。多数決で決めるならば、私は 97 を推して負けます。多数決で決めるなら負けますけども（会場笑）、そうじゃないならば大勢に従います。

筑紫：私のつもりとしては、この 4 点全部をもう一度採決したってですね、何も結論が出ないので、2 つぐらいに絞って、それで決を採らせていただいて…。

城戸：時間もオーバーしてしまう…

筑紫：だけど、決めないといけないでしょう（笑）。そういうことで良ければ、今言ったような整理で 6 番、それから 123。これ、それぞれ挙手していただいて、どれが……

対馬：（選考委員の人数が）偶数だけ大丈夫？ 齋藤先生いらっしやらないから…。

城戸：齋藤さんが…

筑紫：ともかく、やってみるよりしょうがないんじゃないですか。ただ、やっぱり 6 番の話、対馬さんが言われた話っていうのを無視しないでちゃんとそれぞれ選考委員の胸において各人の責任で判断して…。

いいでしょうか。もし、そういうことでよろしければ、新人賞、6 番が適当だと思う方は手を挙げていただけますか。お 1 人ですか。それでは 123 番が適当だと思う方、挙手をお願いいたします。3 名と。みんなそれぞれ一長一短あって、それからご自分の推した人が取られなかったということにはなりますけれど、一応、形の上ではこの 123 番ということに、最終的な選が集まったということでもよろしいでしょうか。

じゃあ、どうも長丁場ありがとうございました。そういうことで結論とさせていただきます。

引き続き、奨励賞をそれぞれ推薦いただきたいと思います。今までの選考経過の中でも

う決まっている方いらっしゃると思いますけど、とりあえず確認のため、それぞれ。じゃあ、今度は城戸さんから。

城戸：ちょっと待ってください。

筑紫：まだだめですか。そうか、そうだね。

城戸：123番……

筑紫：一押しですものね。

城戸：奨励賞だと思っていたので。まさか今のような結果になるとは…。

筑紫：分かりました。それじゃあ、逆、対馬さんから推していただけますか。

対馬：67番でお願いします。

筑紫：67番で。

対馬：はい。

筑紫：対馬康子奨励賞と。それから中村先生、よろしいでしょうか。

中村：いいです。

筑紫：6番で。

中村：はい。

筑紫：承知しました。それでは西村さん。

西村：97番。

筑紫：97番。大体皆さん、それぞれ推された方が奨励賞になっているということで。いかがでしょう、城戸さんは。

城戸：120番でお願いします。

筑紫：ということになりました。それぞれの作者の名前は、また後で事務局のほうから披露していただきます。それではここまで正賞のほうが決まりましたので、今までの議論を踏まえて、関さんに特別賞の選考をしていただきたいと思いますのですが、この33点の中に入っていないものも含めて選考をお願いいたします。

関：特別賞は一応、148点の応募作、どれから選んでもいいことになっているので、本賞をすでに取っているものは奨励賞をすでに取っているものに重ねて受賞するっていうことも可能性としてはありなのですが、それはさすがにもったいないからやめます。

本来は予選落ちしてしまったものの中から敗者復活的に拾えれば理想的だったのですが、今回、今の討議でも大体お分かりいただけましたとおり、魅力のある、それぞれ個性のある作品はあったにもかかわらず、だめなところに注意するとどうかっていうのがいっぱいあって、その中で埋まってしまった惜しい作品があって、私も今の時点で何も取っていないもので、顕彰したいものがいくつもありますので、結論を言いますと66番。

口語調ということで、他者を意識して心をストレートに詠んでいるということが言われましたけども、これは口語調の俳句って実は難しいというか、前衛様式文体と口語調って、一見新しげに見えて、実は一番なんか古くさく見えてしまいかねないものなのですけども、その中で独自の表現ができていのではないかと。表現の内容としても、川柳に近くなり

そうなところも多いのですが、文体としてぎりぎりのところで俳句にとどまっている作品ということで、文体上、結構な完成度が実はあるんじゃないかと。

(66番目の方の) 48番目の句だと、例えば「魚って舌べらありましたっけ冬銀河」っていうのがありますが、これ、言われたら確かによく分かんないなっていうのを拾ってきて、季語を付けるっていう。これは作り方としては川柳に近い着眼点かもしれないのですが、文体としてちゃんと俳句になっているのじゃないかと。季語が付いているっていうだけではなくて。

それから 49番目、「横顔は留まりその他蒸発す」。これはなんか、好意を持っていたり、思い出に残っていたりする人の横顔は覚えているけども、その人も遠い存在になってしまったっていうだけの抒情的な内容であれば、詠み方次第でどうとでも野暮っとなるのですが、「その他蒸発す」でこれはかなり清潔感が効いた気がします。これもなんか言葉で躍らしてる、何とかしているというだけではなくて、自分の中でちゃんと消化できている感じがする。

それから、実は写実的なものだけでも、文体でちょっと変な見え方をしているのもあって、7番目、「ベンツから出る右腕、を見る立場、サイレン」っていう、読点が入っている句があつてですね。これはサイレンが鳴っているから非常事態、たぶん事故現場とかそういうことなのかもしれないと思うのですが、見る立場っていう自分まで入っていて、全体的に断片を積み重ねる写生でこの読点を通して、この書き方がなんか、映画の中で特殊なショットの積み重ねをやっているみたいな効果が出ていて、これは写生の仕方と文体との相互技で結構面白かったです。

それから 63番目、「稚児振り向きあらゆる引用をする唇」。これは稚児で、祭りの期間、神の使いた的な立場になっている子供なのかなと、そういうイメージも出ますけども。こういうちょっと普通の人間から離れた位置にいるきれいな子。その唇っていうことなので、エロチシズムの要素もありますけれども、その子は普通の人間の立場ではなくなっているということが「あらゆる引用をする」っていうことで、その言説空間の形で出てきている。これもなかなか面白い捉え方だと思いました。

それから実感が伴っていて、写生的というか写実的というか、そういう実感があるのは 96番、「海老は海老を踏み電話掛かって来た気がしてる」。これは「海老は海老を踏み」って、水槽の中でたぶんエビがひしめき合って、そこで踏み合っているっていうのは実感があって、エビに同情まではしないけども、ちょっとそれに共感している感じがして。それを見ている、この「電話掛かって来た気がしてる」っていう。かかってきたわけじゃないけど、そういう錯覚が起こるといって、この飛躍の仕方が面白いのと、エビも甲殻類なので、電話じゃないけど機械的な感じのする生き物でもあるし、そのイメージの飛ばし方と距離感がうまいです。だから、必ずしも見かけほど口語だから得しているっていうわけでもなくて、ちゃんと使いこなしている、面白い句がいろいろあると思いました。

理屈が通っている句もちょっとあるのかもしれませんが、148編、全部読んで 120

番台以降ぐらいに前衛的で魅力的な作品が並んでいたもので、そっちから取りたい気もしたのですが、大量に読んでいく中で、独自性と新鮮さと生きの良さがあって、読んでいても楽しかった。この先、読みたかった。この先、この人の他の作品も見たいと思ったのは 66 番でした。以上です。

筑紫：ありがとうございました。それではこれで、今、第 6 回芝不器男俳句新人賞の全ての賞が決まりましたので、ちょっと再確認いたします。

新人賞は 123 番。それから城戸朱理奨励賞が 120 番ですね。それから、ちょっと順不同になるかもしれませんが、西村我尼吾奨励賞が 97 番。対馬康子奨励賞が 67 番。それから中村和弘奨励賞が 6 番。それから関さんが選ばれた特別賞が 66 番ということで、これで全ての賞が決定ということになりました。

どうも長時間にわたり、選考ご苦労さまでございました。また、会場の方々、本当にありがとうございました（会場から大きな拍手）。

司会：選考ありがとうございました。それでは続きまして、授賞式のほうに移らせていただきたいと思います。私のほうより、先ほどご選考いただきました各賞の氏名の発表をさせていただきます。

第 6 回新人賞につきましては、受け付け番号 123 番、愛媛県松山市の田中泥炭さんの受賞となります。田中さん、本日いらっしゃいますでしょうか。おめでとうございます。田中さん、前のほうへどうぞ（会場拍手）。それでは受賞理由につきましては、ご説明を新人賞につきましては、実行委員長の西村委員長にお願いいたします。

西村：もう長々としゃべりませんが、ずっと聞いていたように、やはり表現も、それからその芸術性も各選考委員から非常に高く評価されて、まさに次代を担う非空非実の文学としてですね、立派な作品を作られたと思います。どうもおめでとうございます（会場拍手）。

司会：受賞されました田中さんには、賞金 30 万円の他、副賞といたしまして、ガラス工芸作家ノグチミエコさまよりガラス工芸作品と、荒川区より記念品のほうが贈呈されます。本日、ご来場いただいておりますので、西村委員長より、副賞でありますノグチさまのガラス工芸作品の贈呈をいたします。ガラス工芸作家ノグチミエコさまから、こちら「雪月花 富士」という作品を受領いたしております。ノグチさまよりコメントがございます。

「二つとしてない貴重なものとして、富士山を不二と表現してきた本作は芝不器男賞にふさわしい贈り物かと思ひ、今年には本作を選ばせていただきました。真っ白な富士が、何も無いところから創作をしていく作家たちのピュアな心のように思え、作家の感性で富士山の風景も彩られていく。季節の移り変わりや自然を芸術として高めてきた日本の文化を担う芝不器男新人賞を記念し、贈呈いたします」。

それでは西村委員長、お願いいたします。

西村：どうもおめでとうございます。ノグチさんは、アジアコスモポリタン賞を受賞され、作品は ASEAN 本部の美術館にも展示されている世界的なガラス工芸作家で、これはサインの入った彼女の作品ですから、実はこれは賞金より高いと思います（会場笑、拍手）。

司会：田中さん、おめでとうございます。賞状と賞金につきましては、後日、追ってご贈呈させていただく予定でございます。受賞のお言葉をお願いいたします。

田中：このたび、大変光栄な賞を頂きまして、心からうれしく思っています。

対馬：すみません、年とお名前。

田中：私、田中泥炭（ぴーと）という名前になっております。「泥炭」と書いて「ぴーと」なんですけれども。今回、こちらのほうに来させていただいたんですけれども、まさか自分が受賞するとはみじんにも思っておらず、Tシャツで来てしまいました。

当然、最終通過作品が示された時点で、全ての作品に目を通して、いい作品ばかりだなと思っておりまして。特に最後の 6 番の作品、作者に関しては、私自身ライバルだと思っていたところもあったので、彼と競えたことっていうのが受賞と同じぐらい喜びが今あります。何言ってもいいか分からないんですが、この賞を頂いたからにはこの賞を発展させれるような作者になれるように、これからますます勉強してやっていきたいなと思っております。どうもありがとうございました。（会場拍手）

司会：田中さん、ありがとう、おめでとうございます。続きまして、城戸朱理賞の発表をいたします。受け付け番号 120 番、東京都練馬区の櫻井天上火さんです。櫻井さんは本日いらっやっていないと思いますが、ウェブ、Zoom 会議においてご参加いただけていると思っておりますので、ご本人、今喜んでいるのではないかと思っております。城戸朱理賞に関しましては、城戸先生より本人への栄誉のお言葉をお願いいたします。

城戸：120 番の櫻井さん、おめでとうございます。作品に関しては、前段の討議で、対馬さんから「無季ですね」という一言が。それから関悦史さんからは、加藤郁乎風な世界と言葉がありました。とにかく、このような踏み外しであっても、それが俳句であるっていう、俳句に回収されていくっていう、非常に俳句っていう定型自体の海のような広がりっていうものを感じました。ぜひ、これからも書き続けていってください。

司会：ありがとうございました。受賞した櫻井さんには城戸先生から頂く賞状の他、賞金 5 万円、さらに副賞を頂く予定となっております。さらに荒川区より、記念品も贈呈をさせていただきます。

続きまして、対馬康子奨励賞の発表をいたします。受け付け 67 番、宮城県名取市の浅川芳直さんとなります。浅川さんは本日、こちらにいらっやっていると伺っております。浅川さん、前へどうぞ（会場拍手）。浅川さんには賞状の他、賞金 5 万円と、副賞として本日、対馬康子先生より色紙の贈呈をさせていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

対馬：浅川さん、おめでとうございます。俳句のリリシズムって、私好みのリリシズムだと西村が言いましたけど、そのリリシズムこそ俳句の真情だと思っているので、これから

もいい句をたくさん作ってください。私の30代までの句集と、色紙を持ってまいりました。

司会：浅川さん、もしよろしければ受賞のお言葉をお願いします。

浅川：昨日来たのですけれども、宮城県から出てまいりまして本当に良かったです。私は宮城県で生まれて育って、今もおりまして、私が通っておった高校というのが、ちょうど瑞雲寺という、芝不器男が仙台で下宿しておった所がすぐそばで、「あなたなる夜雨の葛のあなたかな」という句碑も非常に身近でありました。ですから、芝不器男という名の付いたこの賞を頂けることを大変うれしく思っております。

それから選評も大変うれしく聞いておりまして、批判的な評でも、確か西村先生から「素朴な抒情だけれども、まだまだ未完成である」という厳しいことをいただきましたが、私は結構古い人間で、自分の俳句は自分の投影でありたいと思っており、まさに素朴で未完成な私の本質というのをよく捉えていただき、大変感謝しております。今日は本当にありがとうございました（会場拍手）。

司会：浅川さん、おめでとうございます。続きまして、中村和弘奨励賞の発表です。受け付け番号6番、北海道北広島の高鸞石さんの受賞になります。高鸞石さんは本日、会場のほうにはいらしておりませんが、ウェブでご参加いただけているもようでございますので、中村先生のほうから高鸞石さんへの受賞に向かってのお言葉を頂ければと思います。

中村：どうもおめでとうございます。大変、もう繰り返しませんけれども、よく勉強されているということで、将来性というのでしょうか、期待できる一人と思っております。

ただ、これは皆さんにも喚起しておきたい。僕も言い忘れちゃったのだけど、一句、「ババア」と、こういうね。これは非常に今、社会がナーバスになって、10年ぐらい前に許されたことが、今日許されないこと。

内容がいいんだからいいじゃないかということにならない。言葉を使ったこと自体で指弾されるということになりますのでね、そこは若い人たちが冒険的に俳句を作り、いろんな言葉を使う。その時にね、やはり普通の感覚でいくと同時に、ちょっと不安になったら調べてみる、先輩に聞くということをね、したらいいんじゃないかなというふうに思います。

全体的に見て、レベルが非常に高い。そこは、僕はこの評価は揺るぎません。この1句で評価は決して揺るぎませんけれども、そういうものを書く人間っていうのは、やっぱりそういう心遣いというのも片方で大事というふうに思います。以上です。

司会：ありがとうございます。高鸞石さん、おめでとうございます。高鸞石さんには、賞状、賞金5万円および、副賞としまして中村和弘先生より色紙の他、荒川区より記念品を贈呈させていただきます。

続きまして、西村我尼吾奨励賞の発表です。受け付け番号97番、三重県津市の藤田哲史さんがご受賞されました。藤田さん、本日はらっしゃっておられますね（会場拍手）。どうぞ、前へお願いします。西村先生、どうぞ前へ。

西村：おめでとうございます。西村我尼吾句集をお渡しします。プラス、これはほとんど

ツケに近いんですけども、今、私が延々と言うとりましたことを、草稿、これ 17 万 6000 字にはなっとる、あなたに対する評価を書いたんです。私が研究している分析俳句序説の現在の結果がこれですので読んで、私に感想を聞かせてください。ツケをお願いします。どうぞ。おめでとうございます。

藤田：ありがとうございます。

司会：藤田さん、受賞のお言葉をお願いします。

藤田：三重県津市の藤田哲史です。前回、「です」で終わった 100 句を出させていただいて、若干、もうほとんど作者がばれているんじゃないかっていうのがあったんですが、それで、そしてそれに対する批判もいただいて、それがかえって私にとっては良かったことのように思います。むしろそういったところも含めて、今後もっといい俳句が作れたらなと思っております。ありがとうございます（会場拍手）。

司会：ありがとうございました。受賞おめでとうございます。西村我尼吾賞を受賞された藤田さんには賞状、賞金のほか、副賞として西村我尼吾先生より詩集等、さらに荒川区より頂いた記念品を贈呈させていただきました。

最後、特別賞の発表です。特別賞は受け付け番号 66 番、東京都の早船煙雨さんです。特別賞の早船さまには、賞状、賞金 5 万円の他、副賞として関先生からの記念品の他、荒川区よりこちらの記念品を贈呈させていただきます。

それでは以上で表彰式を終了させていただきます。

受賞者の本日いらっしゃっていた 3 名の皆さま、よろしければこちらで選考委員の方と写真撮影を行わせていただきたいと思います。前にいらっしゃってください。

第六回芝不器男俳句新人賞

芝不器男俳句新人賞	田中泥炭	123 番	
-----------	------	-------	--

第六回芝不器男俳句新人賞 選考委員奨励賞

城戸朱理奨励賞	櫻井天上火	120 番	
齋藤慎爾奨励賞	-	-	推挙なし
対馬康子奨励賞	浅川芳直	67 番	
中村和弘奨励賞	高鷲石	6 番	本人より受賞辞退
西村我尼吾奨励賞	藤田哲史	97 番	

第六回芝不器男俳句新人賞 特別賞

特別賞	早船煙雨	66 番	
-----	------	------	--

